

郷土に学ぶ — 学ぶ子孫会を目指して —

講師

ながみね たかし
琴似屯田子孫会事務局長 **永峰 貴** さん

【プロフィール】昭和18(1943)年小樽市生まれ。北海道教育大学札幌校卒業後、教壇に立ち、札幌市立稲積小学校の校長を最後に平成15(2003)年退職。昭和20(1945)年から琴似屯田兵だった祖父に割り当てられた地に住む。郷土誌の発行や歴史講演・講座など数多くこなし、平成20(2008)年から西区のコミュニティFM・三角山放送局のパーソナリティとして「屯田兵グラフィティ」を担当。北海道屯田倶楽部会員。

キーワードは「一番」ということで、まず琴似が兵村第一号となったわけについてお話をしていきたいと思えます。屯田兵の目的は、ロシアの南下政策に対抗して国を守ると同時に、未開の大地を開拓し人の住めるところに変えていくことにありました。したがって、その屯田兵を置く場所は、次の二つの条件を満たしている必要がありました。

■兵村「第1号」をどこに置くか

第一に、その地域は、防衛上あるいは治安上重要であること。第二に、戦略の面でも、開拓の面でも一個中隊が入植できるだけの地積・面積があること。

つまり屯田兵が入植する場所は、防衛的には外敵の侵入に対抗しうる場所であればならず、このころ道南では暴動もありましたから治安対策にも配慮する必要がありました。そして開拓事業面を考慮すると、屯田兵の家族が食べていけるだけの生産をあげられる肥沃な土地であることが必要だったのです。

当初の候補地は、道南の函館周辺、そして札幌と室蘭の三か所を考えたようでした。

道南の函館周辺の地とは、江差・福山(今の松前)辺りを考えていたようです。なぜなら、ここには、旧松前藩の館(たて)の士族や、榎本武揚の旧幕軍の脱落者や旧幕府の役人たちがたくさんいて、生活に窮乏していたからです。また、室蘭地区は、北方領土を防衛するための海軍の拠点となる港として重視された

からで、時代が少しくだった明治二十(一八八七)年と二十二(一八八九)年に輪西兵村が設置されています。しかし、開拓という面から見ると、相当な土地面積が必要のため、結局、二つの条件に見合う最初の土地として札幌に絞られることになりました。

■函館・室蘭消え、月寒か小樽か

問題は、札幌地区の兵村をどこにするかでした。有力な候補地に月寒地区がありました。「人斬り半次郎」とも呼ばれた桐野利秋が札幌を視察したときに推薦した所で、松本十郎大判官も同じ意見でした。農業には向いた地域でしたから、兵村の目的の一つである開拓という点から見ると、好都合なところでした。

しかし、戦略面に問題がありました。つまり、兵力の移動に難があったのです。まだ、鉄道も開通していない時代で、兵村設置から二年後の西南戦争(一八七七年)のときには、琴似と山鼻両兵村で組織された第一中隊と第二中隊は、小樽港へ向かう途中、銭函で一泊せざるをえませんでした。もし、これが月寒からだすると二泊三日が必要となり、とても急ぎの動員には間に合いません。

というわけで、開拓使最初の屯田兵村は札幌の市街よりも西に設営する必要があったのです。

それであれば、北方領土の海域を防衛する根拠地であると同

時に、樺太への往来と物資輸送の拠点でもあった小樽に兵村をつくれればよさそうにも思えます。ところが、坂の街・小樽では、開拓事業を行うために必要な肥沃で平坦な地積はとても確保できないのです。

銭函より東にある軽川(がるがわ)はどうかというと、ここは火山灰地と泥炭地で農耕に好条件とは言えません。兵村を設置しても農業経営に支障が生じて、屯田兵とその家族が定着するのは難しいと考えられたのです。

■本府防衛に適した肥沃な平野部

こうして、最後に残ったのが琴似と発寒でした。琴似は、発寒川と琴似川とがつくった扇状地で、肥沃な平野部でした。その上、発寒には、安政四(一八五七)年に、幕臣の山岡精次郎や永田休蔵らが「在住」として開墾に入り、農作物を収穫したという実績がありました。「在住」は武士が農民を引き連れて来るのに対し、屯田は兵自身が農業をするという点で制度的に異なりますが、彼らは「屯田兵の魁」といっても良いでしょう。

小樽への移動、そして札幌本府を防衛するという戦略的な面と、肥沃な平野部に位置する開拓事業の面からも好都合な琴似に兵村第一号が誕生することになったのです。

一番の誇りと試行錯誤

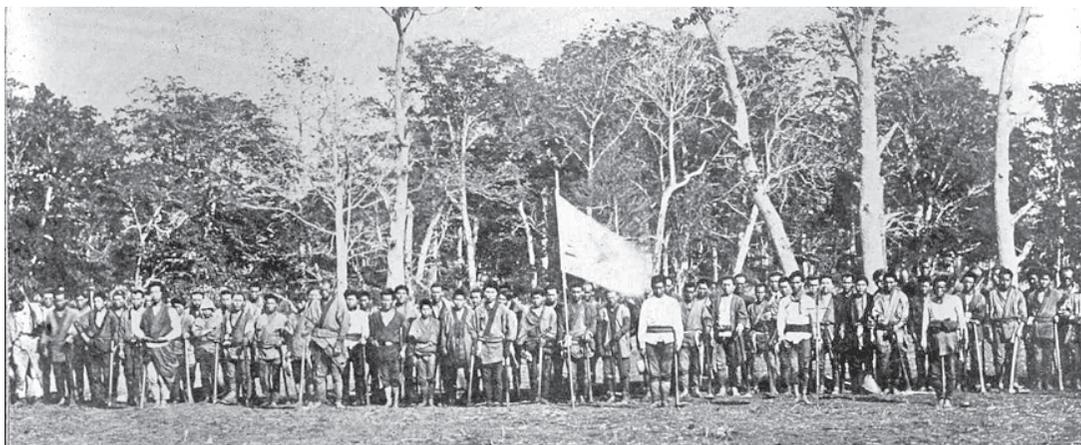
こうして琴似を最初として土別まで三十七の兵村が次々と設置され、明治三十七（一九〇四）年まで屯田兵制度の歴史が続ききました。その最初から最後まで唯一見続けてきたのが、琴似ということになります。

琴似屯田子孫会の仲間から話を聞くと、やはり多くの方が「屯田兵の一番だった」ということを大きな誇りにしています。しかし、琴似が開拓使最初の屯田兵であるが故に、その歴史は試行錯誤の繰り返しでもあったのです。

最初の試行錯誤が、兵屋の設計でした。

琴似には二つの兵屋が残っており、どちらも同じ間取りです。図面（次ページ）では和室が八畳と四畳半になっていますが、最近になって、「本当は六畳と四畳半ではないか」という異論が出てきました。確かにこの図面では入り口が不自然な点など疑問が生じてきますが、実際のところはよく分かりません。

琴似屯田の兵屋の設計に当たって、黒田清隆には「暖かくしてやりたい」という思いがありました。平屋だけれども厩うまやを付けて煉瓦製の



琴似屯田兵が初めて開墾をしたときの記念写真

カッヘルという炉も付けた外和内洋の設計案でした。

「薄紙様の家屋」と酷評

ところが予算不足もあって、結局出来上がったのが、一部土壁で、屋根は桧葺き、暖を取るのはいりりです。窓は隙間のある板の戸（無双窓）で窓ガラスなどありません。内側に障子をはめる仕組みですから、風の強い日には、板壁の隙間や煙出しから寒風や雪が吹き込んでくるのです。

そんなわけで兵屋の評判はよくありませんでした。松本大判官は「東京旧幕組屋敷足軽之宅也」と酷評し、明治七（一八七四）年に来道したケプロンも「薄紙ノ家屋」とその不適切さを指摘し、設計した村橋久成は兵屋担当を首になりました。

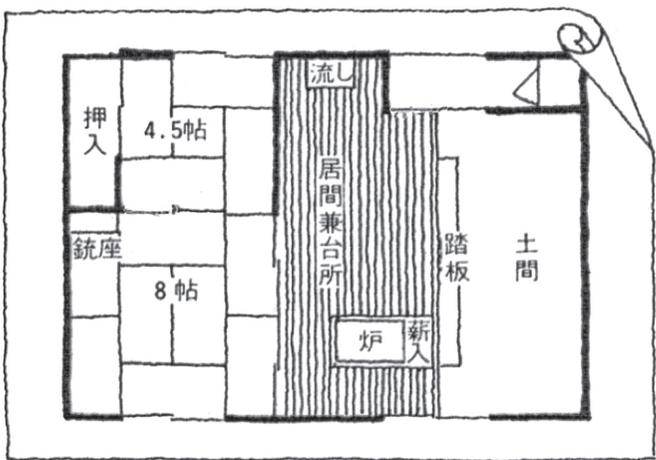
もし、暖房付きのちゃんとした家が琴似に出来ていたなら、その後の兵村の兵屋も同じようになり、これにならって一般の住宅も北海道の冬をより過ごしやす

いものになったに違いない―著書の中でこう指摘する若林滋さんの考えに私も同感です。

ある人は「琴似の兵屋には賛否両論がある。土別の兵屋などは土壁もなかった」と評論家ぶって説明しますが、この兵屋の暮らしを経験していない人の言です。その寒さといったら、「否」はあっても「賛」などあるはずがないのです。

■寒地対策考えた開拓使、精神論の陸軍省

ケプロンの建言に従い、開拓使は職員宿舍だけは防寒設備を施した洋風住宅にしました。坪単価で比較すると、琴似兵村が十三・四円なのに対して職員宿舍は四十三・五〜五十一・九円と三倍以上の開きがありました。それでも、明治十一（一八七八）年江別に米国式耐寒構造の兵屋十戸、翌年篠津にはロシアのコサック式のログハウス二十戸を建設しま



兵屋内部と間取り図



す。ともにガラス窓で暖炉がありました。

しかし、米国式は琴似の二倍、コサック式は四倍もの建築費がかかることや、洋風の住宅が屯田兵の住習慣になじまなかったこと、そして、日本風の建築洋式と違っていたので、たくさん造ることが難しかったこともあって、以後のものは、琴似にはあった土壁すらない板壁だけの粗末なものになってしまいました。

特に、屯田兵を開拓使から引き継いだ陸軍省は、山形有朋を筆頭とする長州閥で、軍拡を優先しました。先の大戦で掲げ

た「欲しがりません 勝つまでは」といった標語に象徴されるように万事が精神主義で、兵屋の防寒対策など兵と家族に対する配慮は全く無いに等しいものでした。開拓使は、黒田清隆をはじめとする薩摩閥。その兵屋改良志向は、長州閥の陸軍によって無視されたのです。

私は「会津っば」ですから、敵であった長州・薩摩はだめですが、「な

んとか暖かくしてやるう」という開拓使に薩摩の思いには感謝したいと思っています。

■兵屋移転を招いた集団密居型

兵村をどんな構造にするか、どのくらいの土地を給付すればよいのか、これらはすべてやってみて判断するという試行錯誤の連続でした。

琴似の兵村は、兵屋がぎっしり建ち並んだ「密居型」で、一戸分を百五十坪とし、十戸で一区画とする変形碁盤割りでした。集団密居型はコストが安く済むのですが、畑仕事をするときには、そこから遠くの農地まで出かけなければならぬのです。耕地との距離が遠いという集団密居型の最大の欠点、後の兵屋移転問題の原因となっていきます。

琴似屯田の宅地百五十坪（養寒兵村は二百坪）では「野菜も作れない」ということで、一戸につき五十坪が蔬菜栽培地として給与されました。開拓使は、養蚕を兵村の第一の産業にしようと計画していましたから、まず五百坪の桑畑を作らせました。明治十三（一八八〇）年には、五千坪を耕して、なお余力のある者には、更に五千坪を支給することになって、宅地の二百坪と桑畑の五百坪を差し引いて、四千三百坪が給与されることになりました。

明治二十三（一八九〇）年になると、新設の兵村では、一万五千坪（五町歩）が支給されることになったので、琴似兵



琴似兵村に軒を連ねて建ち並ぶ屯田兵屋

の集落を構成している琴似兵村では、手近なところにまとまった土地を与えることができず、発寒の泥炭地とか南の山岳地帯であるとか、はたまた藻岩山麓の八垂別（はつたちべつ）といったように、琴似以外にも土地を求めねばならなくなりました。ですから、遠い

村でも一万五千坪が給与され、下士には更に五千坪計二万坪が給与されました。同年の「土地給与規則」によつて、更に一戸当たり五町歩が公有財産として給与されました。こうして、段階的に給与地が増えていったことで、新たな問題が生じてきたのです。初めから二百八戸に五町歩ずつの土地を給与するという計画ではなかったので、集団密居式

【レジュメより】

奨励作物に見る琴似の農産

辛末（しんご）一ノ村（いちのむら）からの移住以来、札幌本府周辺村落の一つである琴似は、北海道開拓をどうするかという根本問題の実験地としての役割を担う定めにあつたと言えそうです。開拓使最初の屯田兵村の誕生は、以後の屯田兵村のモデルとして試行錯誤が繰り返されたこともあり、この面でも実験地としての役割を担うこととなったのです。

屯田兵入植前年の明治七（一八七四）年の記録には、各村の農産物中、大麦・小麦・大豆・小豆・菜種・麻の六種は毎月二、七、四、九の日に買い上げるといふ布達を出していますから、農家で作られた農産物を開拓使が買い上げて加工品にするという農産加工を行いました。これは、当時売り先のない農産物を加工して製品として商品化させようとした政策によるものでした。この買い上げ政策によつて、農民の生活は、割合と安定していたようです。

屯田兵入植の明治八（一八七五）年からは、小麦と麻と繭の三品と、後に追加された大麦が買い上げ作物となりました。明治十一（一八七八）年からは、特に屯田兵

には麻の耕作を奨励しましたので、開拓使の奨励している作物を作れば買い上げてもらえるということで、それにならつた農作物となりました。

奨励作物の繭は養蚕による織物の生産であり、麻の耕作は漁村で使う漁網の生産、そして大豆は味噌醤油・菜種は植物油の自給であり、大麦は新しい産業としてのビール醸造用の原料であり、小麦は水田耕作が不可能という説による米食生活からパン食への転換を図るといふ計画によるもので、製粉・製パンの原料であつたわけです。これ以外の耕作物は自家用作物に限られていたとみられるべきで、農家は、一種の実験場的役割を担っていたといえます。

しかし、この時代最も力を入れた養蚕は、不慣れと紡績工業の先進地の機械化に太刀打ちできず、次第に衰微していくこととなります。大麻も無肥料耕作を続けたために地力が弱くなつてきたこと、そして防風林を失つた風害に加えて製網工業の機械化に圧倒され、やがて消えていくこととなります。

このころは、肥料の必要性を感じていなかったよう、開拓使は屯田兵に「草木培養糞肥定法」という肥料に対する知識を配っています。それには、「人溺（ひとな）るか腐肥」という言葉が出てきます。人溺は尿のこと、腐肥

ところに、しかもばらばらに土地を持つことになったのです。まさに、琴似が、兵村第一号であったための試行錯誤そのものでありました。

■開拓の「実験地」の役割を担う

この不便を解消するために、分散した耕地を家ごとにまとめ合理的に農業経営をしたいと思うようになりました。そうすると、いつそ家ごとに移転しようということになり、兵屋の移転問題に発展し、この間には移転費用をめぐって村を二分する大論争も巻き起こりました。

二回の大移動と新たに兵村地域に入って来る者によって、琴似の村は大きく変わりました。それでも、三十年にわたる琴似の兵農生活は、土地への深い愛着を培っておりましたから、屯田兵の定着率は一般農民に比べてとても高く、割り当たった兵屋地やその近辺、そして西区界隈に今でも住み続けている子孫がたくさんいるのです。

琴似はすべて試行錯誤ですから、作物も奨励されたものを作っていくほかなかったのです。養蚕から始まって、漁網を作るための麻、豆腐・味噌醬油を作るための大豆、油を絞るための菜種、パンを作る小麦、そしてビールを醸造するための大麦といった作物です。北海道開拓をどうするかという根本問題を解決するために、とにかくやってみて考える「実験地」としての役割を、琴似が担うこととなったのです。



屯田兵は「一番」ではなかった

ロシアの南下政策に対して蝦夷地の守りを固めるため、江戸幕府は安政四（一八五七）年、発寒に大竹慎十郎、山岡精次郎、永田休蔵ら二十人を在住させることにしました。これが西区集団移住の第一号で、当時創建された発寒神社には「安政三年に



永田久蔵の碑と発寒開拓記念碑

始まる」と書かれたものがあり、「三年」は誤りだと思えますが、私はここが札幌で一番古い神社ではないかと考えています。二十人もの農民を連れて来た永田休蔵は、大竹慎十郎と石狩から海岸通りを帰る途中オタルナイ川の辺りで波にさらわれて死亡するといわれていたまじい事故が起きました。そのこと

は堆肥のことです。

新琴似と篠路に屯田兵村が誕生した明治二十年代になると、既に養蚕や大麻が衰微して、新しく亜麻会社や製糖会社が設立して、試験作物として亜麻や甜菜が登場します。また、大麦や小麦・大豆・小豆などの雑穀類が札幌の工場原料として買い付けされたり、ようやく登場した雑穀商人によって買い付けされたりするようになります。まだ泥炭地帯が十分に利用されず、肥料もやっと思い出された程度でした。明治四十年代の軍用燕麦が購入されるようになるまでの約二十年間を粗放雑穀時代といえます。

琴似の主要農産物は、大麦と小麦で市場は札幌。発寒の主産物は麻で輸送先は横須賀でした。

入地後十五年余りの歳月を経た琴似屯田は、既に耕地も整備され、兵役も現役を終えたので、耕作も命令に關係なく自由に耕作物を選べるようになっていました。それでも、全体を通してこの時代は、ビール会社を対象とした大麦、亜麻会社の亜麻、醸造用の大豆などが琴似の農業の中心をなしていたということが出来ます。

明治四十二（一九〇九）年に始まった軍用燕麦と牧草の買い入れによって、琴似の泥炭地帯は燕麦と牧草の耕作地になっていきます。

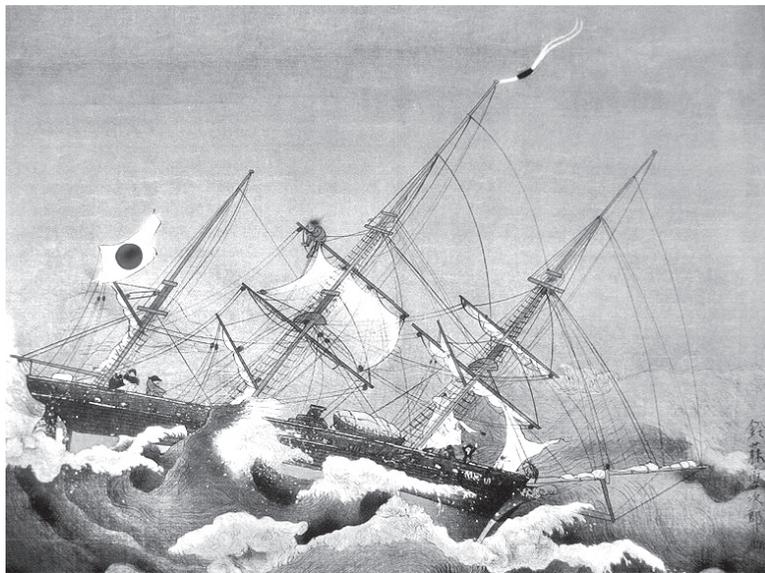
日露戦争後の経済不況は、大豆・小豆を原料とする醸造家も資金不足に陥った上に、北海道大豆の不作に対して満州大豆の大豊作と、京阪地方の製油業者が安い支那大豆を原料にする傾向にあったために、不作の上に虫食いの多い北海道大豆の大半は肥料にしかならないという北海道産雑穀は一大危機に追い込まれてしまいました。

この危機に対する救いは、軍用燕麦の買い入れだったのです。もともと北海道の燕麦は、雑穀商人によって一部は他府県の競馬馬育成地に、一部はウラジオストクに送られていたのです。この燕麦がコサック兵の軍馬の飼料になっていたかもしれないのです。日露戦争で、コサック兵に手痛い打撃を受けた陸軍は、騎兵を拡張して軍馬の育成を図ることになって軍馬用の燕麦牧草を買い上げるようになったのです。これが北海道の農民にとっては、乾天の慈雨となりました。これによって、琴似の燕麦耕作地は、明治四十一（一九〇八）年の三百十五町が大正十四（一九二五）年には千百三十六町へと大飛躍を遂げることになったのです。酸性地帯に強いこの作物は、新琴似、篠路方面の泥炭地帯に牧草と共に非常に勢いで広まっていったのです。新琴似では、この燕麦と明治三十年代からの大根をその裏作として、宅地化が進むまで続けられていくようになるのです。

を悼んで発寒屯田の人たちが建てた碑が、発寒開拓記念碑とともに発寒地区センター横の小さな公園の中にあります。

■第1号は「在住」、2号は「立ち退き組」

そして、明治四（一八七一）年に「八軒・十二軒・二十四軒」に入った人たちが、西区に集団移住した第二号で、第三号が翌



咸臨丸難航図（横浜開港資料館保管）

明治五年に上手稲に入った仙台藩白石城片倉家臣団です。したがって、開拓使最初の屯田兵である琴似の屯田兵は、四番目ということになり、その前に三つの集団が入植していたのです。その第一号と三号、そして四号が武士団

を中核とするものであったのに対して、ここで取り上げる第二号は、武士団ではありませんでした。

十千・十二支の年号から付いた「辛未一ノ村」という村が、今の薄野の本願寺の辺りにありました。開拓使は、薄野に遊郭を置くのに合わせて一帯の区画整理を始めました。このときに既に住んでいた人たち四十四軒を追い払い、彼らが行った先の家の数がそのまま地名となったのです。

このうち「八軒」と「二十四軒」は今も地名として残っています。今の宮の森に当たる「十二軒」の地名は残っていませんが、「十二軒道路」や「宮の森十二軒緑地」という標示にその名残があります。

■第3号は咸臨丸最後の乗客・片倉家臣団

勝海舟、福沢諭吉らがアメリカに渡る際に乗った咸臨丸は、明治維新後、開拓使の御用船として利用されていました。明治四（一八七一）年、片倉氏の旧臣を移住させる目的で松島湾の寒風沢から函館を経由して小樽へ向かう途中、木古内沖で遭難し、沈没してしまいました。

咸臨丸最後の乗客だった白石片倉家の人々は全員無事に上陸し、後続船で小樽に到着しました。この年十一月、古里の名をとって白石村が誕生したとき、移住して来た百五十七戸すべてが佐藤孝郷指揮下の白石村に入ったわけではありませんでした。



三木勉

佐藤のやり方に反感を抱いていた家老の三木勉をリーダーとする四十七戸は、三月までに発寒村に入りました。発寒は、明治五年までは、後の上手稲村と発寒村一帯を含む広い地域を指していました。三木勉たちが入ったのは、今の西区宮の沢の旧国道5号線と中の川が交わる辺りです。手稲村は、明治十五（一八八二）年に、今の西町・宮の沢・西野を中心とした上手稲村と星置を中心とした下手稲村、そして山口を中心とした山口村に分かれることになるのですが、三木勉が入ったのは上手稲村で、これが西区集団移民の第三号です。

☆

入植百三十年を節目に

屯田兵が入植してからちょうど百三十年目に当たる平成十七（二〇〇五）年、琴似のまちはさまざまな記念事業を繰り広げました。西区役所はじめ商店街や町内会、それに子孫会などが一体となったの「かがやけコトニ屯田兵の里祭り」という地域挙げての一大イベントです。

琴似本通りにウエルカムフラッグを連ね、学生服を元に仕立

西区への集団移住の歴史

- ①発寒の在住 安政4年（1857）
幕臣山岡精次郎・永田休蔵・大竹新十郎ら20余人在住として発寒に移住。
- ②八軒・十二軒・二十四軒 明治4年（1871）
山鼻の辛未一ノ村から8戸・12戸・24戸が移住し、それぞれその戸数から八軒・十二軒・二十四軒という地名となった。
- ③片倉家臣団 明治5年（1872）
三木勉を取締とする旧伊達藩白石片倉家の家臣47戸が、白石村に入った人々と別れて上手稲に移住。（咸臨丸最後の乗客）
- ④屯田兵 明治8年（1875）
戊辰戦争で敗れた旧仙台・会津・庄内・松前藩などの士族を中心に198戸が移住し、琴似は開拓使最初の屯田兵村となる。

てた屯田兵の制服を着てのパレードや兵屋跡での菜園事業、歴史展の開催などです。二週間にわたった祭りの期間中には、福島県知事もいらしてくれました。

その歴史展の資料づくりをしているときに、琴似屯田子孫会のメンバーの一人が「これからは学び、発信する子孫会にしなければならぬ」とつぶやいたのです。それまでの子孫会は、屯田兵の子孫だけが集まった単なる親睦会で、外へ向かっての発信など考えてもいませんでした。

しかし、考えてみると、私たちはどれだけ屯田兵のことを知っているだろうか。意見を交わすうちに、互いに学び合う必要が

